令和四年度　入学試験問題

国語（理系）

一〇〇点満点

≪配点は、一般選抜学生募集要項に記載のとおり。≫

（注意）

一、問題冊子および解答冊子は監督者の指示があるまで開かないこと。

二、問題冊子は表紙のほかに12ページ、解答冊子は表紙のほかに16ページある（うち11ページは下書き用）。

三、問題は全部で3題ある（1ページから12ページ）。

四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。

五、解答は、すべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。

六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。

七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。

八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

一

次の文を読んで、後の問に答えよ。（四〇点）

現実は残酷です。今日の若い世代に、古典芸術についてたずねてみてごらんなさい。

コーリン*とか、タンニュー、トーハク、なんて言ったら、新薬の名前かなんかと勘ちがいすること、うけあい。そうしてダ・ヴィンチやミケランジェロならご存じだということになると、(1)どっちがこれからの世代に受けつがれる伝統だか分からなくなってきます。

さらに一例。――やや古い話ですが、法隆寺金堂（こんどう）の失火で、壁画を焼失したのは昭和二十四年のことです。この年、某新聞社の十大ニュースの世論調査では、第一位が古橋*の世界記録、二位が湯川秀樹のノーベル賞、以下、三鷹（みたか）*事件、下山（しもやま）事件などの後に、あれだけさわがれた法隆寺の壁画焼失という、わが国文化史上の痛恨事は、はるかしっぽのほうの第九位に、やっとすべりこんでいた。これは有名な事実です。（法隆寺は火災によってかえってポピュラーになりました。以前には、大仏*殿の年間のあがりが十とすると、法隆寺は一、古美術の名作をゆたかに持っている寺でも、薬師寺とか唐招提寺などになると、〇・一という比例だったと聞きました。それが金堂が焼け、壁画が見られなくなった、と聞いたとたん、法隆寺の見物人が急に四倍にふえたということです。）

伝統主義者たちの口ぶりは目に見えるようです。「俗物どもは」――「近頃の若いやつらは」――「現代の頽廃（たいはい）」――などと時代を呪い、教養の低下を慨嘆するでしょう。

だが嘆いたって、はじまらないのです。今さら焼けてしまったことを嘆いたり、それをみんなが嘆かないってことをまた嘆いたりするよりも、もっと緊急で、本質的な問題があるはずです。

(2)自分が法隆寺になればよいのです。

失われたものが大きいなら、ならばこそ、それを十分に穴埋めすることはもちろん、その悔いと空虚を逆の力に作用させて、それよりもっとすぐれたものを作る。そう決意すればなんでもない。そしてそれを伝統におしあげたらよいのです。

そのような不逞な気魄にこそ、伝統継承の直流があるのです。むかしの夢によりかかったり、くよくよすることは、現在を侮蔑し、おのれを貧困化することにしかならない。

私は嘆かない。どころか、むしろけっこうだと思うのです。このほうがいい。今までの登録商標つきの伝統はもうたくさんだし、だれだって面倒くさくて、そっぽを向くにきまっています。戦争と敗北によって、あきらかな断絶がおこなわれ、いい気な伝統主義にピシリと終止符が打たれたとしたら、一時的な空白、教養の低下なんぞ、お安いご用です。

それはこれから盛りあがってくる世代に、とらわれない新しい目で伝統を直視するチャンスをあたえる。そうさせなければなりません。私がこの、『日本の伝統』を書く意味もそこにあるのです。つまり、だれでもがおそれていまだにそっとしておく、*ペダンティックなヴェールをひっぱがし、みんなの目の前に突きつけ、それを現代人全体の問題にしようと考えるからです。

先日、竜安寺をおとずれたときのこと、石庭を眺めていますと、ドヤドヤと数名の人がはいってきました。*方丈の縁に立つなり、

「イシダ、イシダ」

と大きな声で言うのです。そのとっぴょうしのなさ。*むきつけな口ぶり。さすがの私もあっけにとられました。

彼らは縁を歩きまわりながら、

「イシだけだ」

「なんだ、タカイ」

なるほど、わざわざ車代をはらって、こんな京都のはずれまでやって来て、ただの石がころがしてあるだけだったとしたら、高いにちがいない。

シンとはりつめ、凝固した名園の空気が、この単純素朴な価値判断でバラバラにほどけてしまった。私もほがらかな笑いが腹の底からこみあげてきました。

私自身もかつて大きな期待をもって、はじめてこの庭を見にいって、がっかりしたことがあります。ヘンに観念的なポーズが鼻について、期待した芸術のきびしさが見られなかった。

だがこのあいだから、日本のまちがった伝統意識をくつがえすために、いろいろの古典を見あるき、中世の庭園をもしばしばおとずれているうちに、どうも、神妙に石を凝視しすぎるくせがついたらしい。用心していながら、逆に、うっかり敵の手にのりかかっていたんじゃないか。(3)どうもアブナイ。

『裸の王様』という物語をご存じでしょう。あの中で、「なんだ、王様はハダカで歩いてらぁ」と叫んだ子どもの透明な目。あれをうしなったらたいへんです。

石はただの石であるというバカバカしいこと。だがそのまったく即物的な再発見によって、権威やものものしい伝統的価値をたたきわった。そこに近代という空前の人間文化の伝統がはじまったこともたしかです。

なんだ、イシダ、と言った彼らは文化的に根こぎにされてしまった人間の空(むな)しさと、みじめさを露呈しているかもしれません。が、そのくらい平気で、むぞうさな気分でぶつかって、しかもなお、もし打ってくるものがあるとしたら、ビリビリつたわってくるとしたら、これは本ものだ。それこそ芸術の力であり、伝統の本質なのです。

戦前、私がフランスから帰ってきたばかりのときでした。*小林秀雄に呼ばれて、自慢の骨董(こっとう)のコレクションを見せられたことがあります。まず奇妙な、どす黒い壺(つぼ)を三つ前に出され、さて、こまった。なにか言わなきゃならない。かつて骨董なんかに興味をもったこともないし、もとうと思ったこともない。徹底的に無知なのです。だが見ていると、一つだけがピンときた。

「これが一等いい」

とたんに相手は「やあ」と声をあげました。

「それは日本に三つしかないヘンコ(骨董としてたいへん尊重される古代朝鮮の水筒型の焼きもの)の逸品の一つなんだ。今

まで分かったような顔をしたのが何十人、家に来たか分からないけれど、ズバリと言いあてたのはあなたが初めてだ」

というのです。私のほうでヘエと思った。つぎに、白っぽい大型の壺を出してきました。

「いいんだけれど、どうも口のところがおかしい」というと、彼、ますますおどろいたていで、「するどいですな。あとでつけたものです。これはうれしい」とすっかり感激し、ありったけの秘蔵の品を持ちだしてしまいました。えらいことになったと思った。しようがないからなにか言うと、それがいちいち当たってしまうらしいのです。だが私にはおもしろくもへったくれもない。さらにごそごそと戸棚をさぐっている小林秀雄のやせた後姿を見ながら、なにか、気の毒なような、もの悲しい気分だったのをおぼえています。

美がふんだんにあるというのに、こちらは退屈し、絶望している。

しかし、(4)美に絶望し退屈している者こそほんとうの芸術家なんだけれど。

（岡本太郎『日本の伝統』〈昭和三十一年〉より。一部省略）

注（＊）

コーリンとか、タンニュー、トーハク＝尾形光琳、狩野探幽、長谷川等伯。桃山時代～江戸時代中期に活躍した画家。

古橋＝古橋広之進。第二次世界大戦後、自由形の世界記録を次々と打ち立てた水泳選手。

三鷹事件、下山事件＝いずれも昭和二十四年に国鉄（現ＪＲ）で起こった事件。

大仏殿＝大仏を安置した殿堂。ここは奈良東大寺の大仏殿。

ペダンティック＝物知りぶったさま。

方丈＝禅宗寺院で、住職の居室を言う。

むきつけな＝無遠慮なさま。

小林秀雄＝文芸評論家（一九〇二～一九八三）。古美術収集家としても知られた。

問一　傍線部(1)はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三　傍線部(3)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問四　傍線部(4)について、「ほんとうの芸術家」とはどういうものか、本文全体を踏まえて説明せよ。

白

紙

二

次の文を読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

手紙の返事を書こうとしてもなかなか書けない時、つい日記をひろげてしまう。悪い癖だと思う。手紙は一人の人間に向かって真っ直ぐ飛ばさなければならない紙飛行機のようなもので、(1)紙とは言え、尖った先がもし眼球に刺さってしまったら大変。責任を持って書かなければならない。責任を気にかけすぎると、書きたいことが書けない。それで、とりあえず責任のない日記をひろげてしまうのかもしれない。日記を前にすると頬杖がつきたくなる。頬杖をつくと、顎がかくっと上に向けられ、窓ガラスを通して青い空が見える。

今日の西の空は白い鱗に覆われていて、「いわし」がひらがなで浮かんだ。まだ朝早いせいか、いつまで待っても漢字に変換されない。ひらがなの味も悪くない。火を通さないナマの味。ひらがなで「いわし」と書いてみると、まるでドイツ語で「ふぉれれ」と書いた時のように口の中で柔らかく崩れる。フォレレというのは鰯ではなく鱒のことだけれど、頭の中で魚を介さずに単語同士が互いに結びつき合っている。

わたしが心の中でひそかに「鱒男」と呼んでいたブレーメン出身の青年のことを思い出してしまうのは、今手紙を書こうとしている相手と彼が似ているからだろう。数ヵ月前、知人に頼まれてハンブルグ市の成人教育センターで日本語集中講座の手伝いをした。中級を受け持っている先生が喉の手術を受けてしばらく教えられなくなったということで、わたしはアルバイトで代理として雇われ、週に一度、大学の授業が終わってからセンターに足を運んだ。その時の教え子の一人が鱒男だった。言葉に対して繊細でかろやかな遊び心を持つ学生の多い中で、鱒男は口が重く、実直で無骨な印象を与えた。「赤い家の外に出ます」、「火曜日に、町から外に出ました」、「カエルが川から出ました」など、正しさがぎりぎり怪しい例文を作って文法を稽古するにあたっては、あることないこと文章にしてしまった方が練習になるのに、鱒男は「わたしは学生です」など最低限の守りの真実しか言わず、しかも、そんなことでさえ言うのがばかばかしい、といういらだちが声にも目元の表情にも出てしまう。その鱒男が急に顔をあげて「出たい」と言った時、(2)わたしはどきっとした。前も後ろもなし、ただ「出たい」と言ったのである。

どこから出たいと言う以前に、とにかく出たいのだ、という切実な気持ちだけが伝わった。

「書く」を例にすれば分かりやすい。学生たちは、「書きます」など、いわゆる「ですます形」を初級クラスで覚え、中級クラスでは「書きます」から「ます」を引き算して、「たい」を足して、「書きたい」と欲望を表現する。そういう意味では、「書きます」という形は、「書く」という形よりも直接的に欲望につながっていく。鱒を取り除いて鯛を入れれば欲望が現れる。

そういうわけで鱒男も「出ます」の「ます」を取って「たい」を付けたのだが、それにしても鱒男の「出たい」は突飛で、どこから出たいのか見当がつかない。「出たい、という文章は間違ってはいないけれど、もう少し言ってくれないと意味が分からない」とわたしが言うと、鱒男は眉間に皺を寄せてしばらく考えてから恥じらいもためらいも見せずに、「春が来ると、出たいです」という文章を作ってみせた。こうなってくるとどこから出たいのかだけでなく、誰があるいは何が出たいのかまで分からなくなってくる。

「と」を使ってある状況を仮定してから話者の希望を述べるのはまちがいだと日本語の教科書には書いてある。でもその理由を手早く説明するのは難しいだけでなく、わたしにはその瞬間、その文章が間違っているのかどうか、確信が持てなくなった。春が来ると出たい。鱒男は必死でこちらを見ていた。「春が来ると」という文節を他人の庭の木から折ってきて接ぎ木した。どうして春なんだ、と呆れてみせたい一方、何か本当に言ってみたい時の文章というのは(3)そういう風な手触りなのかもしれない、とも思う。

そしてその日の帰り道、気がつくとわたしは口ずさんでいた。春が来ると、出たいです。春が来ると、出るつもりです。春が来ると出ませんか。春が来ると、いっしょに出ましょうよ。

しばらく歩いて行くと、信号が目の前で赤に変わって、その瞬間どうして「春が来たら」って言わないんだろうと思った。そうすれば、誰にも文句を言われないのに。「春が来たら」と言える人間は、春が来ることを確信している。べったりと確かな未来を今の続きとして感じている。その春を自分が体験できると単純に信じ切っている。つまり、自分が明日死ぬかも知れないということをうっかり忘れている。それに対して、「春が来ると」と言う人は、どこでもない場所から一般論を述べている。話

し手の存在は薄い。声が小さい。何を恐れているのか。自分はどこにもいないのに、急に濃い欲望、出たい気持ちを述べている。そこに矛盾があるのかもしれない。「春が来ると、出たいです。」鱒男は今どこにいて、どこへ出たいのか。

（多和田葉子「雲をつかむ話」より）

問一　傍線部(1)はどういうことか、説明せよ。

問二　傍線部(2)について、「どきっとした」のはなぜか、説明せよ。

問三　傍線部(3)はどのような「手触り」か、説明せよ。

白

紙

三

次の文は、建礼門院右京大夫の歌集の一節で、死別した恋人、平資盛と過ごした日々を回想して、雪の日の出来事や山里での一齣を綴ったものである。これを読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

雪の深く積もりたりしあした、里にて、荒れたる庭を見いだして、(1)「けふ来む人を」とながめつつ、薄柳の衣、紅梅の薄衣など着てゐたりしに、枯野の織物の狩衣、蘇芳の衣、紫の織物の指貫着て、ただひきあけて入り来たりし人の面影、わがありさまには似ず、いとなまめかしく見えしなど、常は忘れがたく覚えて、(2)年月多く積もりぬれど、心には近きも、返す返すむつかし。

年月の積もりはててもその折の雪のあしたはなほぞ恋しき

山里なるところにありし折、艶なる有明に起きいでて、前近き透垣に咲きたりし朝顔を、ただ時の間のさかりこそあはれなれとて見しことも、ただ今の心地するを、(3)*人をも、花はげにさこそ思ひけめ、なべてはかなきためしにあらざりけるなど、思ひ続けらるることのみさまざまなり。

身の上をげに知らでこそ朝顔の花をほどなきものと言ひけめ

（『建礼門院右京大夫集』より）

注（*）

人をも、花はげにさこそ思ひけめ＝『拾遺和歌集』の和歌「朝顔を何はかなしと思ひけむ人をも花はさこそ見るらめ」を踏まえた表現。

問一　傍線部(1)で、作者は「山里は雪降り積みて道もなしけふ来む人をあはれとは見む」(『拾遺和歌集』)という和歌の一節を口ずさんでいる。このときの作者の心情を説明せよ。

問二　傍線部(2)を、適宜ことばを補いつつ現代語訳せよ。

問三　傍線部(3)を、「さこそ」の指示内容を明らかにしつつ現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。